



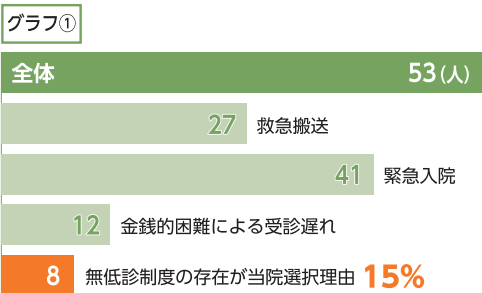
高石市で
初めて

無料低額診療実施事業所として

耳原高石診療所が認可

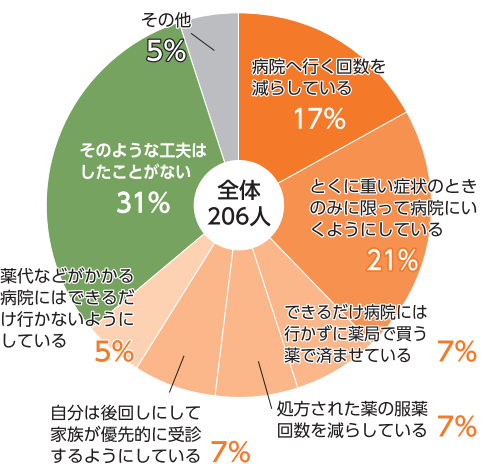
「お金がないから」と受診をあきらめないで、の声を届けよう

同仁会は2009年6月から「無料低額診療事業（以下・無低診）」を実施しています。



2017年 田端志郎副院長出典
日本救急医学会「無料低額診療制度を適用した救急受診患者の背景について」より

グラフ② 医療費の窓口負担や国保料の支払いでお金がかかるため、工夫をされたことがありますか



この6月末からは高石市で初めての無低診実施事業所として「耳原高石診療所」が大阪府の認可を取得しました。しかし、多くの方がこの制度のことを知らず、総合病院の救急外来を受診したのち無低診の適用となった方への3年間の聞き取り調査では、無低診制度を知っていた方はわずか15%でした。(グラフ①)

今年、大阪民医連が実施した「国保アンケート」では「医療費や国保料の支払い負担で工夫していることがありませんか」の問いに対して、みみはらグループで集計した2006件のうち、なんと7割の方が受診を控えたり、必要な薬を服用せずにいたのです。「何も工夫していない」人はわずか31%しかなく、多くが医療費を切り詰めるために、何らかの手立てをとっていたことになりました。(グラフ②)

「全日本民医連・手遅れ死亡事例調査」でも病状が悪化して初めて病院を受診するケースが多く、生活困窮世帯はすべての年代層で増加し、保険証があっても受診を控えるを得ない人の増加が明らかになっています。

医療費が生活を圧迫することで、病気の発見が遅れ、早期の治療に結びつかないことのないよう、「無料低額診療制度」を多くの方に知ってもらうことが重要です。

この間、同仁会では堺市や高石市の関連部署との懇談、地域包括支援センター、保育所や民商などに無低診を紹介する訪問行動に取り組んできました。耳原総合病院では独自看板を病院出入口に設置、各事業所もポスター、リーフレットなどを置いて知らせる活動を進めています。



また、無低診で免除した窓口負担金はどこからも補てんされないため、同仁会の無低診事業を支えるために、健康友の会みみはらでは「いのちを守る助け合い募金」に取り組んでいます。「医療を受ける権利」は平等に保障されるべきものです。そのための「無料低額診療制度」を多くの人に知らせるために皆さんのご協力をお願いいたします。

みみはら 十人十色

シリーズ
みみはらの人 ③



シリーズ第3回目は、総合病院・健診科看護師の西野浅子さんです。21歳で耳原に就職。泉州看護学校卒業後、耳原で32年間働かれた後、奈良民医連吉田病院へ。定年退職を機に非常勤として、耳原総合病院のエントランスの総合案内で、来院された患者さんの相談や案内業務を担っていらっしゃいます。

「みみはら」は私にとって自分の家、ふるさとです

1953年生まれ
長崎県杵臼市出身。同仁会に1973年に就職し、小児科などで勤務。一度退職し、奈良県の吉田病院で10年間勤務。2015年に同仁会に再就職。

西野浅子さん
耳原総合病院 看護師

① 気が合う仲間とお酒を飲むこと。
② 気に入った布で服を縫うこと。

「勇気と希望」です。アウシュヴィツから生還したヴィクトール・E・フランクル（心理学者）の著書「夜と霧」から学んだ言葉です。生きるうえで大切なことです。

「休日のごし方は？」
アコーディオンの練習か、服を縫っています。ときどき、奈良の明日香村へ歩きに行きます。ストレスの解消法はなんですか？

「現在患者さんの案内をされていますが、看護師が担当する必要性は？」
エントランスに「顔を知っている古い人がいるだけでホットする」と言われて嬉しく思っています。毎日、いろんな人への対応が求められ、看護での判断が必要だと思っています。あなたにとって「座右の銘」があれば教えてください。

「友の会や患者・利用者さんへの期待や伝えたいことは？」
昨年からの「健康保険法の一部を改正する法律」により、200床以上の病院である耳原総合病院は紹介状のある病院になり、かかりにくくなりました。昔は気軽にかかれたのにと思いますが、病院は今、どうなっているのかという疑問や職員目線では気づかないうちにご意見をお寄せください。

西野さんの穏やかな雰囲気ややさしい話し方は、患者さんが心丈夫に感じてホットするのだなと思えました。

初診で、不安な気持ちで来院された患者さんや救急搬送された患者さんご家族、紹介状を持たずに診察を希望してこられた患者さん、どの診療科に行けばいいのか困っている患者さんなど、さまざまな方と接してまいります。

症状を聞き、すぐに救急外来へ案内することもある場合は、一旦はクリニックを受診するように案内することもあると思います。

総合病院の案内では、西野さんともう一人のベテラン看護師、板橋さんも活躍されています。お二人とも小児科、救急、外科、精神科など看護師として幅広い知識と経験があってこそ、来院される方の役に立てているのだと感じました。

みみはらを「自分の家、ふるさと」と仰る言葉から、自分の仕事に誇りを持ち、職場を大切にされてきた様子がうかがえます。これからも、勇気と希望をもって頑張ってくださいと思います。(同仁会報編集部)